

# 話し方の指導における方言の問題



藤原与一

話すことは、——これはこれなりに——  
内容の伝達を目的とする。

内容の伝達の成就のために不可欠とされるのは、話す内容の表現の論理である。

日本語での、話す生活の、表現の論理に  
関しては、特に、

1 話しことばで、わたしどもが、しば

しば「主部」→「述部」形式ではなく、

「述部」形式の表現しがちであること。

2 「性・数・格」の数の表現に、わたしどもは、簡明な通用手段を持たない

こと。

という二点が問題になる。(今は、意図してこの二点を取り上げる。)

もとより、方言生活の中の人たちについても、その話す表現生活に関して、表現論理上、右の二問題の存するのを見ることが出来る。方言人たちは、児童も生徒も、その無自覚的な方言生活では、ことに、「述部」形式の表現を多用しがちであり、「数」表現にはむとんちゃくである。

## 二

「述部」形式と言いうる文表現、いわば

「主」→「述」の備わらない文形式の表現に  
方言生活者たち一般が慣れていることは、

まことに著しいものがある。

実は、日本人一般がそうなのではないか。日本語の、文表現法の構造上の特質が、わたしどもに、そうさせているわけであろう。

当然の理由があつて、そうなっているのだとしても、いわゆる話し方が指導される段階では、話しことばの論理の明断のため

に、——話す目的の達成(内容の望ましい(正確な)伝達)のために、「述部」形式表現癖は、問題とされなくてはならない。

考え方・扱い方は二つある。一つは、文に主部を置くように心掛けさせることである。いま一つは、主部がなくても、実際は

相応の主部が内在しているはずであること  
を、常に自覚しているようにさせること  
である。わたしは、方言生活に着目しての  
「話し方の指導」を、右の二点にしほって  
考えてみたいと思う。(——ここが、「話  
し方の指導における方言の問題」を見いだ  
すべき最重要点であると、わたしは考えて  
いる。)

三

東北地方では、人が、老若ともに、「そ  
うです。」「そうだ。」の意で、「ソダ。」「  
ソダソダ。」と言っている。まことにす  
っきりとした返事である。東北の人たちは  
この簡潔な言い方で、その心をパツと開い  
て見せる思いをしよう。さてこの「ソ  
ダ。」の文表現には主部がない。

教室で、適当な機会が得られた時は、こ  
のわかりやすいことは、みんなの、たい  
せつでかけがえのない返事ことばを、取り  
上げてみてはどうか。「ソダ。」は、「なに  
が(は)なんだ。」の言い方になっていな  
い。なっていないことを論題にして、かれ  
らに、文表現の「主→述」構造を知らせ  
る。または、よく考えさせる。ここで、  
「主部対述部」の文構造観念をたしかかなも

のにさせることができたなら、指導はひとま  
ず成功である。

九州地方の大分県下などには、

○チャルチャル。

の言い方がある。やはり返事のことばで、  
「そうだそうだ。」「そうそ。」「といった  
ようなものである。「デアル」が「チャル」  
になったのだから、「チャル。」が「そ  
うだ。」の意味を持って当然である。(近  
畿の紀州南部にも、「チャル。」の返事こ  
とばが存している。)

こういう「チャル。」の地域でも、教室  
で、これが、あたまのない極端な言い方で  
あることを知らせるのは、やりやすくか  
つおもしろいことであろう。あたまの欠け  
を意識させることができたなら、効果の大  
きい指導ができたことになる。

東北や九州には限らない。方言の行なわ  
れるどの境域にも、東北や九州のに似たよ  
うなものが見つかる。例えば、中部地方の  
石川県東南部、白山麓でも、「そうじゃ。」「  
という意味の「ジャンジャ。」が聞かれる。  
ここでは、女の人が年上の男の人に「シャ  
ンジャンジャンジャ。」と、気軽く応答して  
もいた。このことばづかいは、「ソダソダ。」  
にも似ている。中国、山口県地方には、

「そうそ。」「へん答」の意の「ソレソレ。」  
がよく行なわれている。(「そうよ。」「と応  
答する時も、「ソレ。ヨ。」と言う。)

どれにしても、「なにはどうだ。」という  
ような、「主→述」の備わった言い方では  
ない。「主→述」形式から言えば、も  
のが述部の形式になっている。はっきり述  
部的と言い得ないものがある。ともか  
く「主→述」的ではなく、一方的であ  
る。

近畿ことばの「アカン。」(「だめだー」  
など)「アカン。ワ。」、岡山県下の「ラク  
ジャ。」「ラクデス。」(「けっこうです。よろ  
しいです。〈承引〉、四国内に聞かれる  
「フトイ。」(「しめたー」)などでは、この  
簡潔な文表現の、いわゆる主部を欠いた、  
述部の構造が明らかである。

以上のようなものを、教室の問題とす  
る。どのような時間のどのような機会に、  
というようなことは、今、詳論しない。取  
り上げうる自然の機会には、実に多いと言え  
よう。——(これらを、文法問題と見て、  
文法の取り扱いには限りがある。たとえ文法  
と考えることは正しくない。たとえ文法  
〈ことばのきまり〉であっても、それは、  
「文の法」として、常に文中に生きている

ものと考えられるから、わたしどもは、その文法を、ことばの行なわれるどこでも自在に問題にすることが出来る。「アカン」「アカン」「ソダ」などを、その時の、人間の心の表出表現と考えることにすれば、これらは、国語の時間で話しことばを問題にする時にも書きことばを問題にする時にも、他教科で正確な読解や表現を問題にする時にも、ただちに取り上げることが出来るはずである。

取り上げて、この種のを、じっくりと観察させると、かれらは、まずその形態の異様に気づき、次にそのはたらき・役割の妙と大に気づくであろう。かなり低い学年の児童たちも、このようなことに気づきうるのだと思う。早期に、こういう気づきを促すことにしたい。(しだいに、その自覚と知見とを高めさせる予定のものに……)

右の指導によって、わたしどもは、かれらに、文構造に関しての、「主―述」形態の意識を持たせることができる。これは話す(また書く)ことばの生活での表現論理を確保させる教育の基本になる。

四

次には、かれらの方言生活での一々の文表現に、主・述の、述部形式のセンテンスがいかに多いかを知らせ、「できればそこに主部を置いてみる」「できるだけ主部を置くことにとめてみる」練習をさせる。土佐方言を例にとってみよう。

○ヤットトセ。

やって下さいよ。

○オリヤ オリヤ。

お居りよお居りよ。

など、いわゆる命令文の場合には、当然のように、主部らしいものが出ない。(方言にかぎったことではなく、日本語にかぎったことでもない。) こんな場合は、相手に言いかけていることが明らかであるから、「居る」なら「居る」の、主体となるべきものは、だれしもすぐに言い表わすことができよう。

○ユーチャールケン ナー。

言ってやるからね。

○タコーニ ウツチャー セン。

高く売っていやしないよ。

これらでは、「わしが」とか「わしは」とかの主部が省略されていると見ることが出来る。この種の場合も、ことがらを、かれらに、比較的容易に気づかせることができ

るのではないか。気づかせて、事実上の主部を置かせてみる。「だれが(は)――どうする(どうだ)。と、表現の筋・論理を、ここで確認させる。

こうして、第一段には、「人」を表わすことばが主部となる場合を、十分に押えさせる。自他の出現に心を用いさせることにすれば、卑近な場合、自己の利害もはっきりとわきまえられるので、いきおい、かれらは、個々の文の表現の論理を正しうることになる。

第二段に、「事物」を表わすことばが主部となる場合を押えさせる。

○アンマリ スクナイ。

あんまりすくない。

とあれば、何が少ないのかと問う。かれらに、思い思いに考えさせ、少ないとされる事物を言わせる。そのことばを主部に置かせ、新一文を造出させる。――多少とも変形された文ができておもしろい。いな、そのような変形(例、現在表現を過去表現にすること)も自由になされればなされるほど、「主―述」形式の習練は、生きのよいものになる。表現の論理・筋を正す思いが、そこでたしかに自分のものになっていく。

○ナカナカ、テンテコヤスニーニヤイカ  
ン。

なかなか、あっさりかんたんには  
いかない。

これも、「何が(は)」の主部を欠いたも  
のである。その主部を、例置させてみる。

教室で、多くの人たちが、思い思いに主部  
を置く発言をするとなれば、その集団活動  
が、人々に、「主→述」の表現論理を、  
いよいよ深く納得させることになる。こ  
ういうことによつて、かれらはしだいに、

「主・述」の論理を通した、明晰な表現を  
し果たしていくことができるようになる。  
表現力の基礎的陶冶は、簡明に、センテ  
ンスの「主・述」自覚、「主→述」意識  
のところをやつていくことができるのでは  
ないか。

センテンスからセンテンスへとのこ  
ろ、つまり連文上でも、論理的表現  
(論理を通すこと)の、だいたいな訓練が  
できるけれども、今、方言生活につい  
てものを考えるにあたっては、そこは  
しばらく対象にとらないことにする。

方言上の一文にも、時には、長大なもの  
がある。例えば、伊勢方言下の例の、

○トノサンガ、クワナカラ ワタツテ

コサツセルノニ、ハンガ オイモンヤ  
デネー。

殿さんが桑名から渡つて来られる  
のに、橋が多いもんだからねー。

の場合には、連文の場合に考えられるのとは  
ほとんど同じようなことが考えられる。

方言生活に即しての、「主→述」意識、  
「主→述」観念の指導も、漸次、こうし  
た厄介なセンテンスについても、やつてい  
くようにしたい。

右の例だと、「主→述」が二回繰り返  
されている。しかも、全体は、「……だか  
らネー。」の言い方になっていて、その  
点ではなお、「……だから、どうどう。」  
の、「どうどう」の言い方が省かれている  
と言える。(あるいは、その「どうどう」

は、このセンテンスを言う前に、すでに言  
われたかもしれない。)その省かれている  
「どうどう」は、また、おそらく、「主→  
述」の構造を考えさせるものであろう。そ  
の主部がまた、出てはこないものかもしれ  
ない。いずれにしても、文の表現をとらえ、  
ことを分けに付けていけば、わたしどもは

常に、欠けた主部は発見することができ、  
適当な位置に、主部を置いてみることで

きる。

五

そうは言っても、命令文などの場合は、  
事実上、主部を置くと、文表現が不自然な  
ものになる。

○ハヨセー。

早くしろ。

というように、  
「オマイワ」などを置  
くと、文は、通常の場合、異様なものにな  
る。

「主→述」意識の教育の場合、述部的  
構造の文へ、常に主部を置かせてみるこ  
とが重要なのではない。欠けている主部を見  
いださせること、その主部の位置を発見さ  
せることがだいじである。

さらに言えば、主部が欠けている。  
とまでも思わせなくてよい。主部が顕在し  
ないで潜在しているのだと思わせればよ  
い。観念上の主部は、どのセンテンスにも  
認定しうることである。——当人がどのよ  
うに無自覚であろうとも。つまり、主部は  
次主部の外形のセンテンスにも、潜在す  
る。隠在する。それゆえ、「主→述」意  
識の教育も、多くの次主部のセンテンスの  
場合、主部の内在を考定させるように指導

することがたいせつとなる。

話し書く、表現の生活を、自ら行なっていない現場でのこととしたら、わたしどもは、文表現に主部を置かない場合、置きかねる場合（——置かない方が、日本語の表現として、自然であると思われることも多かるう。）も、たえず、しかるべき主部ないし主部的なもの内在を、自覚しているようにしたい。この「内在」自覚の表現行動を、かれらにも、強く促すようにしたい。

主部への思い、さえはたらいていれば、現実の文外形には、主部が出て出なくてもよい。右の思いのはたらしきによって、「主——述」形式による、文表現の筋の通し方は、徹底させられるであろう。

## 六

表現の論理に関しての、第二の論点、「数」については、少しだけ触れるのにとどめる。

——実は、わたしは、この「数」のことを、日本語の文法の問題として、重要視している。英語で、名詞に簡単にsをつけて複数を表わし、常に明確に、物の単複を区別しているのと、日本語で、単複区別の一

定方式を持たないのと、ことのなんと大きく違うことか。

○ワシノ イトコデス。

わしのいとこです。

というのがあつた。そこに寄っている四人のものがみな、というつもりで話者は語つたのだとしても、人を見ないで、このことばだけを聞いたものは、にわかには、四人というようなことは思ひかねる。「イトコです」の「イトコ」に、もし単複の目じるしがあつたら、コミュニケーションに、混乱などは起こらないであろう。

普通、わたしどもは、「多くの人は」と言つて、「多くの人々は」とは言わない。そして、時に、文章中でも、「人は」などと言う。この時は、人一人をさすこともあるし、人の多数をさすこともある。

人代名詞では、「ヲ」「ドモ」などという接尾辞があつて、この部面では複数表示が容易のようであるが、さて「ワシノ、……。」などと言つて、自分だけのことを言おうとすることがあるから厄介である。「テーマドモノ ウチデワ」にしても同様である。

ものに「ナド」をつけても、清少納言が枕草子で、

雨など降るもをかし。  
と言っているのだ、「など、複数」などとは言い難い。

単複問題は、なかなか根が深いようである。とりあえずのところ、教室では、日本語に存する、複数表示可能の方法を、できるだけ手広くかれらに確たさせることを考へてよいのではなからうか。同時に、なるべく「数」を考へてものを書くようにすめてはどうであろう。書く生活で、「数」表現に多少とも意を用いるようになったら、自然に、話す生活でも、「数」表現の實質を高めるようになる。

「数」表現の意識が強くなれば、そこで、日本語表現での明確さ、論理的強靱さは、画然と前進せしめられることと思われる。

## 七

わたしは、与えられた課題「話し方指導における方言の問題」に対処するに当たつて、「方言」を特殊視する、例の方向を避けた。

ここで、「方言の問題」の特殊視に深く関連する「共通語」の考へ方にあえて立ち入つてことを述べると、わたしは、共通語というものも、これを單純に東京語的なも

のなどとは考えていない。共通語は、世の中で、自然に共通語を高めてきたものである。(東京語の多くの要素が、全国的に共通語を高めていることは事実であろう。)

だからこれは、動的なものであり、可動的なものである。国語に生きる全国の生活者

たちは、みな、共通語の共通語を支えるものであって、常に共通語成立に参与していくものである。その参与行動によって、共通語は常に無限に育成されていく。

共通語にとって根本的に重要なのは、人の共通語を求める心にはかならない。この心が、自然の共通語を醸成する。

共通語を求める心は、つまるところ、自己の日々の表現活動での(理解面)のことは、今、しばらくおく)、「通じさせようとする心」である。共通語教育にとってたいせつなのは、既成の共通語を一つ一つ与えていくことではなくて、この「通じさせようとする心」を、かれらにちゃんと持たせることである。この心の持ち主が、自らよく共通語を探求していき(——、これで通じるだろうか?)と、現場現場で試みつつ、共通語育成のよい働き手になっていく。

このように考えられるので、わたしは、全共通語教育としても、かれらに、

□自分の心に浮かんだものなり自分の考えなりを、もっぱら相手に通じさせることを考えて、発音・こえのことや、

文法・言い表わし方のことは——その方言上のこれまでの諸習慣のことは——考えないように!

と訴えたい。相手に当方の思いを正確に通じさせるために考えなくてはならないのは、筋目の正しい表現をするということである。

□よい共通語生活のためには、できるだけ、方言へのこだわりをすてて、なに

よりも、筋の通ったものの言い方に心を向けるように!

と、わたしは、方言生活の中の人々に、強く呼びかけたい。

ここで最も願わしく思うのは、東京語に生き、またはそれに習熟して、自然に既成の共通語を身に着けていられるかたがたが、

心の共通語

通じるようにものが言いたいと努力している人々の表情

を、真に深く理解して下さることである。

(広島方言研究所)